

# 校正用原稿

修正ありません

加筆しているとお  
修正してください

↑ いずれかに○をつけてください

## 私の被爆体験と証言活動

たかまつ まさる  
高松 勝

## ● 被爆前の生活

私は広島県深安郡山野村（現在の福山市山野町）で生まれ育ちました。家族は父、母、兄、妹と弟2人の7人家族で、私は次男でした。当時、兄は召集されて九州に行っており、終戦まで戻りませんでした。召集される前は、安芸郡船越町（現在の広島市安芸区）にある日本製鋼所（株）広島製作所へ徴用工員として働いていたので、私は時々兄に会いに行っていました。兄が出兵する時には一度山野村へ戻り、村の人がみんな白い旗を立てて見送ってくれました。妹や弟たちは小さかったので、山野村の国民学校に通っていました。

私は山野村の国民学校高等科を卒業後、満州へ行きたいと考え、満蒙開拓青少年義勇軍へ応募しましたが、父が反対して行くことができませんでした。山野村から満州へ1人行ったのですが、病気で亡くなったということは知っていません。今思うと、父が賛成して満州へ行っていたら、私は生きて戻ってこれたか分かりません。結局、広島市霞町（現在の広島市南区）にある、広島陸軍兵器補給廠の工員の採用試験を受け、昭和18年4月1日に採用されました。そのとき、私は15歳でした。兵器補給廠では木工の修理の仕事をしていました。

## ● 8月5日

8月5日の晩、空襲警報がありました。空襲警報があると、私たちは警戒のために兵器補給廠へ行かなければならず、その日は夜12時過ぎまで兵器補給廠で待機していました。そのため、6日は出勤時刻がいつもの8時より1時間遅い、9時になりました。

## ● 8月6日

8月6日の朝、私は兵器補給廠の休憩所に腰掛けに寝転がっていると、B29が来たとの知らせがありました。珍しいことではありませんでしたが、虫の知らせでしょうか、休憩所を出て空を見ると、何か黒いものがポテッと落ちるのが見えました。そして、目がくらむようなものすごい光がピカーツとしたので、私はすぐに防空ごうの中へ駆け込みました。同時に耳が裂けるほどの大きな爆音がしました。3人ぐらいい緒にいたのですが、私以外はみな爆風で吹き飛ばされてしまいました。私はすぐに防空ごうへ避難したので爆風から逃れることができ、けがもありませんでした。私は近くに爆弾が落ちただのと思いました。防空ごうから出てみると、砂ぼこりで周りがよく見えませんでした。兵器補給廠からきこえる雲が何百メートルと上がっていました。私がいた休憩所は木造だったため爆風で潰れていました。兵器補給廠の倉庫は頑丈なため残っていました。周りの木造の家も潰れました。

その後は、壊れた建物の中から友達を助け出したり、救護したりしましたが、ほとんどは助かりませんでした。つい先ほどまで兵器補給廠の中で一緒に話したり騒いでいたのに、一瞬のうちに死んでしまって、本当にかわいそうでした。兵器補給廠の近くにあった宿舎も潰れて、寝る場所がなくなってしまったので、夜は防空ごうの中で寝ました。たくさん蚊が入ってくるので、蚊取り線香を手に入れたことを覚えていきます。トイレに行くため防空ごうを出ると、負傷したたくさんの方が歩いてくるのを見ました。その人たちは突然バタッと倒れると、もうそれきり動かなくなりました。そのように倒れた人たちが地面にいつぱい横たわっていました。

#### ●被爆後の惨状

翌日からは、兵器補給廠から1キロメートルほど離れた山に防空ごうのよ  
うな穴を掘り、そこで寝泊まりしました。その山からは、広島がだんだん燃え  
ていく光景が見えましました。今ではビルが建っているため、市内すべてを見渡す  
ことはできませんが、そのときは一望千里何もなく、似島のほうまで見るこ  
とができました。

兵器補給廠には大きな倉庫があったので、避難してくる被爆者をそこへ収  
容していました。正門で名前を聞き取り、倉庫の中へ入れていました。ごども  
何も敷いていない所に、何百人という被爆者が魚を並べたようにダラーッと並  
んでいて、みな全身にやけどをしていて服もほとんど身に着けていませんでし  
た。ほとんどの人が「水をくれ」と言いますが、水をあげるとすぐに死んでし  
まうことが多かったです。生きている人は、2日目には体中にウジがわいてい  
ましたが、自分でウジを払う力も残っていないようでした。ウジを取ってあげ  
ようにも、体中全身にわいているのでどうしようもありませんでした。

亡くなった人々をトラックへ積むのが私の仕事でした。手袋がないので素手  
で運びました。皮膚がやけどでズルズルになっていて、体を持ち上げようとす  
ると皮がズルズルとむけます。そのときの臭いがきつく、ご飯を食べる時もそ  
の臭いが手に残っているように鼻につき、手に紙を巻いて食べたりしました。  
7日以降は、このように亡くなった人々を運ぶ活動をしていました。トラック  
に積まれた死体は、学校へ運ばれ、兵隊さんが油をかけて焼いていました。

福屋百貨店は、原爆により1階が落ちてしまい、地下が水浸しになっていま  
した。かぎをロープにつけ、それを地下へ垂らして引き上げると、かぎが着物  
に引っかかり、亡くなった人がザーツと上がってきます。そのような活動もし  
ました。街中あらゆる場所に死体が転がっていました。今だったら死体1体あ  
るだけでも大変なことですが、その当時は神経が麻痺していたのでしよう。何  
とも思わなくなります。その死体の間を歩いて行きました。死んでいるのが当

たり前という状況でした。一番悲惨だったのは、防火水槽の中で親子が抱き合  
って死んでいる光景でした。

元安川では、亡くなった人たちが流されていました。のどが渴いたのと、や  
けどを

して熱いので川に入ったのだと思います。そしてそのまま力尽きて亡くなった  
のでしょう。その人たちのお腹はパンパンに膨らんでいました。潮の満ち引き  
によって、死体は行ったり来たりしていました。毎年8月6日に元安川で灯籠流  
しが行われますが、ちょうどその灯籠を流す場所で、私は死んだ人たちが川に  
流されている光景を見ました。

#### ●家族との再会

8月9日の朝、親が私を心配しているだろうと思い、休暇をもらって福山へ  
帰りました。福山は8日の夜に空襲を受けたため、もしその晩に福山にいたら  
火の海だったと思います。当時は自動車などはないので、山の中を歩いて山野  
村の家まで帰りました。途中、福山から避難してくる人のために、学校で炊き  
出しをしていたので、そこへ寄って麦飯か何かをごちそうになりました。

家族は、新型爆弾が投下され、広島は壊滅状態だということを、ラジオで聞  
いていたらしいです。私が生きているとは思っていなかったでしょう。再会し  
たとき、親はとても驚き、「足はあるのか」と聞かれました。親は、もう広島に  
帰らなくてもいいのではないかと言うのですが、黙って山野村にずっといるわ  
けにはいきません。私も帰りたくはありませんでしたが、10日に福山駅から  
超満員の汽車に乗り、広島まで帰りました。扉のところに鉄の棒があったので、  
それにベルトをかけて落ちないようにして、外にぶら下がるようにして乗った  
のを覚えています。当時、放射線が広島に残っているということとは全然考え

いませんでした。ただ、軍属としての責任を感じ、広島へ戻ることを決断しました。

#### ●終戦

福山から広島へ戻ってからは、兵器補給廠<sup>ほきゅうしやう</sup>などで救護活動を続けていました。8月15日の終戦のことは、重大放送があるということで、感度の悪いラジオから、天皇陛下が「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」と大きな声で放送されるのを聞きました。戦争に負けて悔しいというより、自由になれてうれいという気持ちのほうが大きかったです。

終戦発表後、1、2週間は残務整理のため兵器補給廠<sup>ほきゅうしやう</sup>で作業をしていたと思います。他の人の中には、何か月も残って整理していた人もいます。それから山野村へ帰ってからは、大工の仕事をしたいと考えたので、山野村の大工さんに弟子入りをして、10年ぐらい大工の仕事をしました。その後、福山の工務店から誘われ、定年前まで働きました。

#### ●体調について

山野村へ帰ってからすぐ、2週間ぐらい意識不明になりました。高熱が出て、うわ言を言い、ご飯も食べませんでした。放射線の影響だったのかもしれないませんが、当時はそのようなことは分かりませんでした。その後は、小さな病気をたまたまにするぐらいでした。しかし、被爆した元氣だった友人が突然亡くなったという知らせを聞くと、私も他人ごとではないと思いました。

#### ●小学校での証言活動

私は、これまで被爆体験を家族にさえ話すことはありませんでした。しかし、被爆者の方が証言をされ、それを高校生が絵に描くという話を新聞やテレビで見、私も伝えていかねばならないと思うようになりました。高校生がとても上手

に絵を描いていたので、私も絵を描いて被爆体験を伝えたいと強く感じました。そこで、公民館に勤めている知人に、「被爆証言を学校でしたい」と伝え、早速福山市立中ちゅうじゅうりょう 小学校の校長先生へ電話をしてくださり、すぐに証言することが決まりました。そして、昨年、私を含めた4人で5年生に向けて被爆証言をしました。

私は紙芝居を用意し、1枚ずつ出して話をしました。紙芝居には、やけどで皮膚がただれた人々、防火用水の中で苦しむ親子、兵器補給ほきゅうじょう 廠に寝かさされた人々、火葬される人々、川に流されていく人々の様子などを描きました。その絵を手作りの枠の中へ入れて子どもたちに見せます。黒板を使用したり、原爆が爆発した地点をスカイツリーの高さと比較して、子どもたちが分かりやすいように説明を工夫しています。子どもたちは、目を丸くしてしっかりと見えました。子どもに話すということはとても難しく、あまり話が長くなると飽きてしまいますし、証言するということは難しいことだと感じています。しかし、一度やってみると、もう一度また証言したいと思えました。そして、子どもたちからは元氣をもらいます。

#### ●子どもたち伝えたいこと

核兵器廃絶、核兵器反対と言っても子どもたちはその意味が頭に入っていないと思います。実際に原爆の絵を見せたり、被爆体験を話したりすることで理解できるのではないのでしょうか。核兵器が落ちるとどうなるかをしっかりと伝え、そのうえで核兵器を作らないよう教えなければいけないと思います。小さいころから教えることで、子どもたちの意識も変わると思います。私は今年も中条小学校へ証言をしに行きますし、次は山野の学校へも証言をしに行きたいと考えています。

そして、もう二度と被爆者をつくってほしくないと思います。今、世界に存在する核兵器は、昔の核兵器の何十倍、何百倍もの威力をもつと言われています。しかし、年代が変わってきたせいか、核兵器やヒロシマに対する関心が低くなってきている気がしていました。本気になって核兵器廃絶の運動をしている人は少ないのではないかと思っていました。ところが、今年、8月6日に行われた平和記念式典に参列した際、とても多くの人が集まっていたのに驚きました。その多くの人を見ると、核に対して関心が高まってきたのではないかと感じます。私も証言ができる今のうちに、たくさんの子どもたちに被爆体験をどんどん伝えていきたいと思います。



〇〇・〇〇  
〈市民が描いた原爆の絵を見て激しい〉

高木正明 77歳

私は八月七日の午後横州駅から入市しました。駅の裏はまき燃えている所もあり、駅前には黒焦げの死体如山のように積上げられていました。道の両側にはぼろぼろになり、腹をペロペロしている被爆者が「水を下さい。水を下さい」と言っており、火傷をした人にも水を欲すると早く死ぬと聞いていましたのと、家族のことが心配なので無視して急いで

歩きました。西蟹屋町にある家は焼けずに傾いているだけでした。妻良や家具は焦れて、血が飛び散ったアスマに消し炭で、府中町の知人の家に避難した。全員無事。と書いてありました。頭にホータイを巻いた父と二人で家を整理し、家族八人がおと生達しました。放射能の事は何も知らされていないので汚染された水を飲み、野菜を食べては喜んで食べていました。終戦後も残された衣類で田舎でイモや野菜と交換してなんとか生き

〇〇・〇〇  
のびてきました。川にはパンパンにふくらんだ

死体が浮いていて、お爺さんがボートでそれを見つめて、川原に運び油をぶっかけておのような死体を焼いておられました。部分的に動き出した列車には担架のせらおを被爆者が荷物車に運びこまれました。生きたままの人におシムシムが火傷のあとにびっしりと糊がつくし、おれを付添の人が着た二つ二つとまんて取りのびておりました。

又

二〇〇三年にNHK放送局が広島市と

一諸に被爆体験を風化させない為に「原爆の絵」を募集して。〇〇枚集めたのを本にまとめて出版しました。又二〇〇七年には広島平和資料館が三六〇枚集めた市民が描いた原爆の絵を岩波書店から出版されました。この二冊の本を読んで、お三者がお守った絵壇と運つて市民一人一人が何十年も戦争に焼きついていた記憶を絵は下手でも平和への祈りをこめて描いた絵は私の心に響きました。生々しい原爆の悲劇を後世に伝えるためにはぜひ

3

この本を世界に広めたいと思いました。三冊  
 だけでは広えきれないからこの二冊の本に  
 はびりしりつまっています。市長さん及県知  
 事さんがNPI準備委員会に出席される前に  
 中国新聞投書欄にこの本を塚山持って行って  
 参加国の各り一々に配り、それぞれで  
 この本をなめるように書いて投稿したのです  
 がホツでした。特に岩波の本には英訳もつ  
 ているので世界に通用します。NHKにも寄  
 新を出して、この本を映像の絶頂して日本中

の人がこの本を見るようにとお願ひしました  
 が無視されました。私は五十歳の時国がんの  
 手術をしてる分の二検出し、三年前には中耳  
 炎をちがらり難聴になり [redacted] ですが  
 一ある機会を通じて市耳が描いた原爆の  
 絵をひろげる運動を続けたいと思っております  
 。原爆の絵NHK版一二。→十巻岩波版一五  
 の。丹十巻の書紙も平報記者資料館に在り奉  
 託。来年は原爆七十周年を関心が高まるので  
 この本を世界に広めたいを望む。

高安正明 87歳 丁巳しんん

## 5 2回目の被爆の日を迎えて

武田幸子

(夫、武田雅男より聞き書き)

このたび教会から夫武田雅男の原爆体験を話してほしいとおおすめがありました。3年前■歳で亡くなりました武田は、実は被爆後25年はそのことについて語ろうとはしなかったのです。又その後の25年は健康を患い言葉も不自由でしたのでなおさら私は聞きだすことができなかったのです。それでおことわりしたのですが、それでも語れなかった人の最も近くについて何か感想があれば話してほしいとお言葉に励まされ、勇気を出してここに立たせていただきました。

被爆後十日目突然私どもの疎開先の田舎に一日だけ帰ってまいり、広島の惨状と自分の体験と、無事に今まで生きていることを報告の形で話してくれました。そのことを思い起こし、又話せなかった武田の心境とその後二人が原爆とかかわりながら歩み続けたことをお話しさせていただきます。

当時武田は今の中電病院の南側にありました日本発送電広島支社の勤務しておりました。原爆投下の前の年11月に広島に転勤してきました。宮島沿線古江の借家からカキ色の国民服にゲートルを巻き背中に防空頭巾と鞆をかけて、オンボロ自転車で大手町の会社に通勤しておりました。昭和20年になりますとますます全国の各都市へのB29の空襲が激しくなり広島も今夜あたり間違いないと町内会から通知があるという緊張した状態でした。市内は建物疎開、学童疎開が強制的に行われておりました。当時古江はまだ郊外で、強制的ではなかったのですが、私は3人の幼児を連れて山口県玖珂郡錦町へ20年5月に疎開いたしました。そこは錦帯橋があります錦川の上流40kmの山の中です。武田は岩国の叔母の家に預かってもらい、そこから広島まで汽車通勤するのです。当日も西岩国から山陽線で己斐に着き、己斐駅から市内電車で相生橋を渡って大手町に向かっておりました。8月6日朝8時15分、電車が土橋の手前で小網町あたり来たとき突然急停車、電車の中は猛烈な暑さと爆風で外に飛び出たこのことです。外は家がぺちゃんこになっているし、人々は道に倒れている、いったい何が起こったのかわからないまま夢中で元来た線路づたいに向かいました。

最初の電車専用の鉄橋は歩いて渡ったが、次の己斐駅橋は自然に燃え上っていたので歩くことが出来なくて、川下に回って元任んでいた古江にたどり着きました。途中真っ黒い雨にあつたのでワイシャツを元任んでいたところの大家さんの井戸で洗って夕方近く叔母の家にたどり着きました。同じ朝の列車で岩国から通勤通学していた人たちが、ご父兄や身内の方々が、夜になって自分の家ではまだ子供が、主人が帰ってこないが、武田さんはどうして帰られたか、また広島の様子は？と次々に尋ねてこられたそうです。それに答えることは本当に辛いこと苦しいことの実は武田は電停に行くのが遅れて最後の列に並んでいて前に行く人は満員電車に鈴なりになって中には、知人が目の前を手

を振っていかれるところを1.5 Km余りの自分の電車より先に行かれた方は、ほとんど電車と運命を共にされたことは後でわかるのですが、その世はただ自分ひとりここに帰ってきていることの辛さを痛感したようです。

次に翌日から毎日山陽線都市内は歩いて会社まで行くのです。自分が乗っていた電車をはじめ町は焼け燦れ火傷を負って歩けないでいる人々、川に飛び込んで膨れ上がっている人々、会社も全滅の状況、昼は同僚を探して救護所を訪ねて歩き廻り、夜は他県から探しに来られた家族の方々と焼けトタンで囲みを作り、会社跡で野宿もしたそうです。武田が大変お世話になった方は通勤途中のはずだったので、奥さんと一緒に道々死体をかき分けながら探したけれど見つからないので、ご本人愛用の碁石と被爆死された御嬢さんのご遺骨と共にリュックに入れて、奥さんおひとりで東京にお帰りになると涙しておりました。同僚の方も即死か、無事に帰宅されても原爆症で次々と亡くなれば犠牲者の方々の生き地獄図は、本当に口にできないと申して以来沈黙して語らず、というより語れずということが私にも痛いほどわかりました。背負冠を許された武田も爆心地1.5 Kmの地点で一時放射能を受け黒い雨に会い、二次放射能のある焼跡を歩き、いつ原爆症がだても不思議はないと思っておりました様です。とにかく命ある限りは復興のため働くことが残された者の使命と思ひ無茶苦茶に働いておりました。その年の11月に白血球が3000になつたのでお医者さまから田舎で療養するよう言われたといつて、ヒョロヒョロと私どもの疎開先に被爆後2度目の帰宅をいたしました。折から収束期の真っ最中で、ゆっくり静養できる状況でもないので、男手として労働してもらいより仕方がありませんでした。ただきれいな空気と新鮮な野菜、収穫したばかりの食糧をいっぱい食べて全くの自然療法一か月のうち激務の広島へ戻っていきましました。

最近先生（長く我が家のホームドクター、戦後はABCCの日本人医師として米国の調査に携わる）に白血球のことをお尋ねいたしましたところ、被爆直後は0で200～300と上がり、3000はもう回復期ですね。それまでに多くの人が原爆症で亡くなられたのです、と教えていただきました、健康体は4000から1万くらいとお聞きしなると恐ろしい絶対に使ってはならない爆弾であることに改めて身震いを覚えました。武田の属しておりました小さな課はほとんど全滅。生き残った二人で奮闘し、東京の本社へ夜行列車で往復、当時東京は大変遠く、食糧難の折から東京で何を食べていたのか、原爆に会って以後は広島はどこかで暮らしていたようですが、どんな生活をしていたのか、連絡もないし想像もつきません。

昭和22年、宇品に会社の仮設住宅が13軒できましましたので、3年ぶりでやっと家族一緒に暮らすようになりました。

昭和26年ポツダム政令とかにより、各地の配電会社と送電電が一緒になり、中国地方では広島に中国電力が出来ました。その時日本発送電広島支社で殉職された百数十名の方の慰霊碑が建てられることになりました。大手町の元会社のすぐそば、元安川の緑地帯ガンバ区投下当時会社の配電室の地下壕のあった上ださうです。武田は心を込めて、

どんなにか深い感慨と使命感を持ってこの設計をさせていただいたことと思います。当時ポツポツ出来始めた慰霊碑とは形が少し違っているのが初めて見た時「西洋のお墓のようですね」と私が言ったことを思い出します。又そのそばに立って上から見ますと十字架のように私には見えません。主人は黙って何もそのことについても申しませんでした。が、横石の後ろ側に突き出た石があるのです。毎年原爆の日の前には周りが清掃され、お花やお線香が建てられています。

昭和44年、第2の会社で元気に務めておりました9月、武田は突然倒れ左半身ひどいマヒ状態になり2か月全然動けませんでした。そして枕辺で毎日毎日「神様もう一度立たせてください」と祈り続けました。そのとき武田がもうその祈りはやめにしようと思しアツケにとられている私に、主の祈りをしようと申します。私も二人で毎日主の祈りをいたしました。私は愚かですからもともと切実なお祈りがしたくて「お父さん、主の祈りの中で一番心に響くのはどこですか」と変な質問をいたしました。そのとき武田は「御心の天になるがごとく地にもなさせたまえ」と申しました。私ははっと気づき申し訳なく思いました。主人は自分のことよくなり、あの悲惨極まりないさまを見たら後は、何より地上の平和を心より祈り続ける人であったのです。発病後一年くらいは一人悩んでいる様子でしたが、その後24年の長い年月、辛いとか不自由とか一度も言ったことを覚えておりません。病身は不思議と平安でお見舞いに来られる方がびつくりしておられました。全然動けなく寝たきりになってから12年間左半身マヒがあるものですから、水や食べ物を飲むことに失敗して嚥下性肺炎になり危険なことがたびたびありました。いつもその都度「先生が助けてくださいます。神様のなさる奇跡の連続は「御心の天になるがごとく地にもなさせたまえ」、彼の祈りと病室の有様も合わせて感謝いたします。

今から12年前昭和60年、中国新聞に広島電車内で被爆した人があったら、その場所と体験手記を報告してほしいと、広島電鉄よりの募集記事が目にとまりました。私は武田に昔聞いていたことだけ教行しか書けませんでしたが書いて出しました。やがて60人ほどの人の証言集と生存者の名簿、当市内にいた電車と同型の写真、当市内を走っていた電車の位置などの地図が丁寧に送られてきました。被爆後40年たっていましたが電鉄のなさった誠意に本当に感謝いたしました。今も大事にいたしております。

平成2年8月6日第2回目の電鉄主催の電車被爆者の集いに初めて代理として出席させていただきました。30人余りの出席者でしたが、当日「先生が中心になってよい会が持たれました。この方は福屋前の電車で被爆され、片目を失明なりましたがその後学校の先生をなされ、原爆反対、原爆反対、平和のために力を尽くしておられる方です。このように家や家族を失い又原爆症に悩んでおられる方、辛い目にあった方は夏が来るたびに体調を崩すとか、そのことを語るときは今でも身が固くなり、心臓がどきどきしてくるといわれます。そのことを乗り越えて、あえて語り部になっている方がたくさんあることも思います。殊に世界中を行脚して声を出しておられる方々の勇氣と強い使命感に

打たれます。いま世界中はますます危険にさらされている気がいたします。広島の原爆よりもっともっと破壊力を持ったものがたくさんあるのではないかと思います。日本に受けた2つの原爆の恐ろしさを一人でも多くの人に知ってほしいとの想いのみで直接被爆体験をしていない語る資格もない私ですが武田に代わって話す時を与えられたことを感謝いたします。

原爆碑に書かれてある「過ちは繰り返しません」は弱い言葉のようですがこれほど大事な言葉はないと思います。多くの犠牲者の方が声もなぐいかれた、その声を代って声にしなれば、本当に申し訳ないと思います。そして地上の平和を切に祈るばかりです。

#### (4) 本行職員の体験記

日記抄 (その2 8月6日から)

8月6日 月曜日 午前8時20分

事務服にアイロンをあて終って、さあ早く出かけよう、と立ち上った時、表の方がパーッと明るくなつたと思うと物すごい音がしてザーッと土砂が降って来て真暗になってしまった。

何も見えず、耳には蓋をされたようで通か彼方で母の声がしている。非常な土やごみ埃の為に目も口もあけられず窒息しそうであった。夢中で手きぐりに手拭を探して口にあってと初めて息を吸った。

歩こうとすると座板が落ちていて、ひどく踏みはずしてしまった。柱時計が落ちているのを知らずに踏みついたりしながら、ほうほうの体で表に飛び出した。

ひどい爆撃だったらしい、火の手は方々に盛んに上っていて、私の家の隣からも火の手がちらちらと姿を現わしはじめている。これでは消そうにも家の中へ踏み込まれない。家は半分倒れかかって、今にもどっと頭上に落ちかかって来るかも知れない。先づ避難するより他に道がない。

火に囲まれない内に、というので祖母、母、妹二人を指図して風上へ風上へと急いだ。

道路には夥しい怪我人が右往左往している。皆裸体の上にはぼろをまとっている。何時の間にかこんな惨めな有様になったのである。一人の小母さんが私に飛びついて来て「何か刃物を貸して下さい、うちものが家の下敷になっているんです。」と言われるが、相増台所へも行けない有様である。「あそこが台所です。庖丁でも持って行きなさい」と言いながら、自分では家の中へ入ることもしない私であった。倒れる家の下敷になる覚悟でなくては探したり物を持ち出すことは出来なかった。

私共は固唾を呑んで火の迫らない所へと焦りぬいた。父が留守なので皆の指図を私がしなければならぬ責任がある。

やっと家のない所まで逃げて来てはっと一息ついた。然し畑の中にかんがんでいると、爆撃の目標にされそう、おびえてばかり居た。隠れ場所がないのである。

不意に空から火の柱が降って来て側の田の中に消えた。俄雨が降って来て白い服を点々と黒く染めて行った。座板を踏みぬいた傷口から血がどくどくと出て、モンペをぬらし乾いて板のようになつた。銀行はどうなつたらうと一夜中案じた。

火は市中をなめ尽くす模様である。焰は赤く天上を焦がし油罐などはじける音が夜通し続いた。

8月7日 火曜日

昨夜中案じていた銀行に急ぐ、母達には安村の方に行く様にと言っておいて別れた。道々之が片付けられるだろうかと思われれる様な死体や負傷者を大勢見た。

衣服は破れ殆んど裸体で、髪はほうほうに逆立ちし、皮膚は赤黒く火傷している。「水を下さい、水を

下さい」と瀕死の人がわめき子供は泣き叫び、二目と見られない惨状である。橋を三つ渡る間に、その橋のたもとに群れている死者や負傷者は千人を超えていたであらう。元気な人々の往来も激しく各々別れ別れになった人をたずねているらしい。

銀行の被害は想像していたよりもずっとひどい。シャッターまで飛び千切れている。頭にも当たったら即死したに相違ない。誰か手伝いに来て居られるだろうと思っただけは大違いであった。Aさんは火傷で元気なし、BさんとCさんだけが元気でいらっちゃった。廊下は負傷者ばかりで足の踏場もない。

銀行の外にも現送口にも死体が取乱した形で横になっている。気を強く持って現送口から入る。Dさんに「みんなは？」とお聞きすると、つぶやくように「地下だ」とお答えになった。

内に踏み込むと、地下室は真暗で、やたらに足を取られて前進出来ない。足さぐりにそろそろと歩く。気味が悪いので「誰か居られますか」と声をかけると、声が反響してわんと聞える。微かに「居るよ」という声が出たのに力を得て又恐る恐る進む。扉が吹き飛ばされているその上を歩き金庫のあたりに来た。声で判断すると、Eさん、事務員のFさんがいらっしゃる。目を大きく開いて見たが人の姿は見えない。私は「Gさん」とお呼びしてみた。「誰だ」と云うお声がする。「Hです」とお声のする方へ行くと、布団を敷いて横になっておいてになった。「お怪我は有りませんか」とお尋ねすると「よく来てくれた。嬉しい」と私の手をとってお立きになった。銀行に来る途はIが御無事かどうか非常に心配であったが、負傷なさったとはいえ命がおありになったとは泣きたい程の喜びである。

嬉しいと云うのでは言い足りない。なんとも言えない気持である。

昨日留守であった父が、尋ねて来た。「お前は銀行に行っているだろうと思っただ」と言っただけで私と一緒に二階の支店長室を片づけてくれた。大きなテーブルが窓に馬乗りになっていた。二・三人の力でないと動かせないのに、よく窓に乗り上げたものだと感じた。

Jははじめ、負傷された銀行の人はトラックが迎えに来て、専売局の病院に入れられた。

私も付いて行った。夜は警防団の団服に身を固めた男の人が大勢銀行に泊られた。私共といっても元気なのは二・三人、その中でも女の人は私だけであるが、一は宿直室の血まみれの壁に取りまかれて蒸し暑い、寝苦しい夜を過した。

8月8日 木曜日

ひどい傷に一夜中うわごとばかり言って居られた事務員のKさん、朝早く息を引き取られた。惜しい方であったのに。すぐ横の方にある蓋地で火葬になさる。(Lの記憶、八月9日)

岡山からMが御来店、早速専売局に御案内した。岡山医大の先生を連れておいでになり、



はじめ、みんなをお見舞いになった。午後、銀行に帰って一人寂している所へ、思いがけず  
が帰っておいでになり、御重態のにと、驚いた。然し行務を御覧になるのにはここに居られた  
方が御都合がよいたくない。専売局病院には蚊が多くて我慢出来ないとおっしゃる。夜分、傷がひど  
くお痛みになる。その内に空襲警報の知らせがあり、地下室に退避した。暗く廻っばい所にうづくまっ  
ていると悪寒がして来た。

8月9日 木曜日

頭髪がじりじりになってさばけていて埃まみれなので水で洗髪した。胸が苦しい。注射を打っていた  
だいた。

8月10日 金曜日

頭痛が甚しい為、焼けてがらんどうになった二階の応接室に横になって眠る。ビタミン注射一本。

8月14日 火曜日

父がやって来て、本家の伯父、伯母は確実に死んだらしいと言う。爆心地に居ただから助かってい  
る筈はあるまい。叔父も今だに生死不明。どこかに収容されていていそな気もする。家の者は毎日探し疲  
れているだろう。

8月15日 水曜日

今日も父が銀行の私のところへ寄ってくれた。体がだるくて仕方がない。負傷者の繻帯交換を手伝う  
と、胸がむかついて眠れないのでやめる。行員食堂は収容した人達の傷の臭いが腐肉のにおいをおさ  
せている。は「無理をするな」と何時もおっしゃって下さる。より見舞金を頂戴し恐縮した。  
正午ラジオで玉音の録音放送があるとのこと、ポツダム宣言を受諾するという。国民一般は随分疲労し  
てはいてもまだ事態がここまで立ち到っては居ないと思っていたらう。広島市のように焼きつくされ  
て瓦礫ばかりを名残に留めている所では「やはり来るべきものが来た」との思いを察くするものがある。  
私は空襲の恐怖から脱したと云う安堵が先に立つのを否定することが出来ない。軍都であった広島市  
が今は全滅して、一般の人については、沙数の人た<sup>と</sup>聖我人ばかりである。停戦という言葉をきいての  
反響は耳にすることが少なかった。

ラジオはない、電燈は勿論つかない、情報は遅れ勝ちの新聞や、人の口伝えに入って来るのみである。  
私は茫然としていた。事務員のさんは、夕食の仕度も手につかないといった様子で、「負けたの  
では私達は何の為に生きているのかわからないではない」と何もしないで座り込んで居られた。  
夜は遅くまで岡山医大のを囲んで話は尽きなかった。

1/3

田中稔子 (カワコ)

広島に於ける原爆体験と平和への思い 2014, 5, 22

私はずっと、原爆の悲惨な体験を可能な限り忘れて、明るく前向きに生きたいと願ってきました。数年前まで、自分の子供にも詳しい話はしませんでした。当時の凄惨な情景を思い出したくないし、聴く人を暗い気持ちにさせざるを得ないが故にです。しかし私自身はこの体験から一生逃れられません。火傷の傷跡は薄くなりました。しかし心の傷は消えませんが、心を癒す一つの手段となりました。それは約半世紀、今も続いています。1945年の夏、私の家は、爆心地近くの水主町に有りました。しかし幸いにも、原爆の僅か一週間前に、強制疎開で2.3キロ離れた牛田町に引っ越しました。

しかしその町もきのこ雲の下でした。そして火傷と放射線被害を受けました。

8月6日の朝8:15分、6歳と10ヶ月、小学一年の私は、学校に行く途中でした。「敵機B-29が来た」と叫ぶ声に、空を見上げた途端、強烈な閃光が直撃しました。瞬間、眼が見えなくなりました。とつさに顔を腕で覆ったので、右腕と頭、左首に火傷を負いました。爆風で吹き飛ばされたのに、最初は何が起こったのか分かりませんでした。そして辺りは闇夜の様に真っ暗になりました。原因は爆風で舞い上がった、熱を帯びた埃です。砂埃は口の中に入り、味の無い、不気味なじりじりとした感覚が今も残っています。その内、腕の火傷は幾つもの大きな水ぶくれとなって強烈な痛みが襲って来ました。辺りを覆っていた埃はおさまりましたが、恐ろしさで、泣きながら家に帰り着きました。家はめっちゃめちゃに壊れていました。母は無事でしたが、私を見ても我が子が気が付きませんでした。なぜなら、私の姿があまりに変わりに果てていたからです。

髪の毛は焼けて縮れ、顔や手足は真っ黒、服は破れ、ボロボロのようだったと言います。しかし子供の私はその時、家の破れた屋根から見えた青空を、なぜか美しいと思います。が今でも私を勇気付けてくれたのです。私はその夜から高熱が出て、意識がなくなりました。しかしその日に起こった夕方までの衝撃的な出来事は、今もはっきりと覚えています。暫くして私の家の方へ、多くの瀕死状態の人が、無言でふらふらと歩いて逃げて来ました。安田女学校の生徒さん達も混じっていました。なぜか多くの人が、前に伸ばした両手の爪が白く白っぽい物をぶら下げているのです。良く見るとそれは、火傷で肩から剥けて垂れ下がった彼ら自身の皮膚だったのです。その様子はまるで幽霊の行列のようでした。

私は今でも、パーベキューのトマトを見るとゾッとします。皮が簡単に剥けますが、人間にもそれが起こったのです。幼い子供達は、誰も世話が出来ないのに、見知らぬ大人に付いて逃げて来ました。そして多くの人達が、力尽きて、炎天下の道端で、そのまま死んでゆきました。1発の原爆で一つの都市が消え、140,000人の市民が広島で死んだと云われますが、それだけでは済みません。生き残った人も、その次の世代も放射能の影響で苦しむ事になりました。前述のように、私はその夜から高熱が出て、数日間意識がありませんでした。治療してくれる医師も死に、病院も廃墟となって手の施し様がありません。生死は体力と運が分かちました。2歳年下の妹は額に深い傷を負い、高熱で呻く私の死を、

2/3

母は覚悟したと言います。その時父は、兵隊にとられて留守でした。数日後、奇跡的に私の意識が戻った時、町は耐え難い悪臭に覆われています。腐った魚を焼くと、そんな臭いかも知れません。毎日膨大な死体を処理する為、牛田公園や小学校の校庭で焼いていたのです。同居していた20代の叔母、末子は、朝出掛けたまま、69年たった今も帰って来ません。主人の伯父一家は、赤ちやんを含む6名全員が死にました。縁有って、今私とその姓を継ぎ、お墓を守っています。

母はその困難な時、逃げて来た人達を獲れた我が家が家に泊めました。夜遅く来た親戚の青年は、焼けたバケツに母親の頭部を入れていました。母親は倒壊した建物の下敷きになり、抜け出せないまま火に焼かれ、残酷な死を迎えたのです。青年の、母を助け出せなかった事へ無念と怒りは、深い心の傷となり、原爆について彼が語る事は一生無かったです。10代のお姉さんと幼い姉妹も泊りました。お姉さんは元氣そうで大火傷をした妹を背中背負って来たのですが、その姉がすぐに死に、火傷の妹が助かりました。姉の方は致死量の放射線を浴びていた様ですが、一般市民はその時、放射能の事を知りません。皆、不思議に思いました。その後、妊婦の胎児に多くの奇形が現れ、ABCCが収集したホルマリン漬けた胎児の標本写真を私も見ました。放射線は直接体にダメージを与えるばかりか、次の世代に引き継いで影響を与えます。そこに通常兵器と核兵器の決定的な違いがあります。「折り鶴」のサダコさんは、私と同じ織町中学校の、4歳年下の生徒でした。2歳の時とバクしても元氣だったのに、12歳になって突然、白血病になり亡くなりました。千羽以上折った鶴も、願いを叶えてはくれなかったのです。私の場合も10代から体に影響が出て、免疫不全で長い間苦しみました。視力障害も子供の頃から有り、両眼の手術をしています。骨折もし易く、大腸からの原因不明の出血など、今も苦しんでいるのです。同じ被爆者である妹の子供たち3人に、甲状腺癌などの病気が出ている事にも確率的影響を感じます。そこに、2011年3月の、フクシマの原子炉事故被災者への思いが重なります。今は体に影響が無い様でも、親は我が子の将来への健康不安、積み重なって行く放射線量への不安等と一生を共にせざるを得ないのです。

原爆被爆当時は、アメリカ軍の占領下で核の被害を話す事はタブーとされました。多くのヒバクシヤは自分の体験を話さなくなりました。例え話しても、結婚に支障が出る事が多く、差別の対象にさえなったのです。友人の一人にその犠牲となった娘が居ます。私は75歳になった今、謂われるままにやっと被爆証言が出来るようになりました。理由の一つは、若い人達に、将来2度と同じ体験をして欲しくないからです。そして日本は、核の恐ろしさを知っている被爆者が居るのに、狭い国土に原発の乱立を許し、フクシマ事故に繋がったという後悔も有るからです。数年前、ピースボートで2度、世界を回りました。その時各国で、戦争の犠牲になった多くの子供や若者に出会い親しく交流しました。彼らは苦しみの中で、一生懸命前向きに生きています。私もヒバクシヤとして何か行動を起こす責任を感じました。今ニューヨークの国連NGO、ヒバクシヤストリーズに参加し、大学、高校で証言をしています。ここ4年の間に、手分けして15000人の学生に

3/20

「核の無い世界」を、と訴えます。原爆投下を命じたトルーマン大統領の孫、クリフトンさん一家とも交流が有ります。今彼等は「核の無い平和な世界」を願って活動しているのです。日本の若い人達が世界に友人を作る事はとても大切で、爆弾や放射線が降り来ない美しい青空が、世界の子供たちの上に何時までも広がっている事を願い、若い人達が国際的に繋がって行く事。戦争文化ではなく、平和文化を作って行く努力を怠らない事。その連帯が広がれば、「核の無い世界」は必ず来ると信じます。それがヒバクシヤの心からの願いです。

昭和二十年八月六日午前八時十五分着いた閃光  
が走つた。それは空襲警報解除の後である。私は  
その時爆心地より一八軒はなれた当時大須賀町  
の川辺にあつた石島鉄道病院に看護師として  
勤めていた。いと五ふ音と共に天井から物が  
どんどん落ちて来たのでうすびまつた。形のない  
くたつた階段を無我夢中で走り下り玄關にま  
たそこには火傷の人頸動脈から血が噴き出て  
おる人倒れ二人お人などが押し寄せて来た。病  
院を廻りに集つた人であつた。その時程自分の  
無力さを感じたことはない。私はハンカチを首  
に巻いて上がった。その時左前を聞りてありな  
つたことを悔んで居る。医療器具と薬が居たの  
を知らずすすむた。東練兵場今の新幹線北口  
の辺を救けて矢賀の国鉄の工務部にたじりつ  
いた。そこでにぎり飯を一つもらい飢をしのい  
だ。三日三晩着のみの着の儘で過した。毎晩空襲が  
あつた。近頃の山に蚊にくわれなう夜を過し  
た。八月九日に三次の国鉄診療所に患者が送ら  
れるのが行く運命じられた。実家が庄原で通は

れるからである。当時練成所の建物は二十人位  
の国鉄の学徒の負傷者が運ばれて来た。それは  
目を覆ふ状態であつた。それから半年一日も休  
まず四ヶ月の道を駅迄履物も着る物もないので  
半纏いの服と草履を下駄をはいて足の痛みに耐  
えて通つた。薬もないので十分な治療は出来な  
かつた。患者さんの足の指の爪の間にうじ虫が  
固つて動き痛むを訴へる人。又破傷風が七しな  
る人。耳のちぢみする人。肺炎が亡くなる人。皆十五  
六才の子供である。今尚思ひ出すと胸が痛む。母  
親が看病しておる患者もあつた。がその心  
情を思ふと荒れりし自分おれもつと一人をす  
べき事があつたのがはと齡を重ねる毎に懺悔  
の毎にである。どうか子や孫のため何時迄も核  
兵器と不人道的な物の使用なき平和な  
世の中であつたことを切に願つて居る。  
破文樓 提督の震へる爆轟心 千原 孝子